

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	川内さん追悼 <故 川内且昭君の遺稿及び追悼>
Author(s)	西村, 和子
Citation	広大言語 , 6 : 76 - 77
Issue Date	1966-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046255
Right	
Relation	



だれか一人でも、きょうだいに注意してやることが、できなかったのか」と書いている。

Kは、当然、後方を確認し、バックミラーを正しい方向へセットしておくべきだった。しかし、Kは、メシを食べるため、重労働の牛乳販売店員として、機械のように、働く必要から、それを怠った。久美子ちゃんは、ナイーブさゆえに、弟といっしょに、どこでも、おかまいなく、天子みたく、羽ばたこうとする。通行人は、“優しい心”の持主でなく、しかも、生きることには追われている。「車の後ろで、ジャリが遊んでらあ」と、危険を感じないし、感じようとしなかったのだらう。

久美子ちゃんは、川内君、そして、K・車は、いまの社会機構、通行人は、僕——と僕は思う。社会機構は、川内君を、ひき殺した。

<僕は、社会機構を、絶対許してはいない>。自分自身も許されない。“優しい、おもいやり心”は、本質的ではないが、個人を助け、社会を楽しくする。

「川内君は、死なずにすんだのに」と、僕は思う。ナメクジのように、クニャクニャした僕でも“心”を持った個人に、すこしでも近づこうと、努力すれば、川内君は、僕の“罪”を許してくれるはずだ。

川内さん追悼

西村和子

川内さん、あなたの死が私にはどうしても信じられません。死は人間誰れしも避けることのできない訪れですが、若い私たちにとっては、それは、ずっとずっと先のこととっていました。ですから本当にあなたの死が信じられないのです。

ときどき、ふと錯覚を覚えることがあります。今でも、あの講義の一番後方の一番高い席で、例の細長いカードの束を手にした川内さん、あなたが黙々と資料を集めていらっしやるのではなにかしらと……

生粋の広島子である私は、方言を研究していらしたあなたには、恰好の資料源ではなかったのでしょうか。私たちの話す広島弁をカードに一枚一枚、丁寧に書き取っておられた川内さん、そのあなたが亡くなられたただなんてとても信じることはできません……折角の方言の研究も途中で終わってしまって、さぞご無念なことでしょう。私の広島弁も、学問的に考察される絶好の機会を永久に失ってしまったのですね。みっともない私の広島言葉もあなたのお力で、何かもっと重

要な、とるに足る価値を付加していただけるものと内心期待していましたが、残念でし方ありません。

今はただ、あなたのおあとに続いて方言を研究される立派な後輩がきっとわが言語学研究室から生まれることを信じつつ、川内さん、あなたのご冥福を心の底からお祈りするばかりです。どうぞ安らかに……………

或る夏の一夜

秋田時子

夏の夜空があの一パノラマを展開した時
暗闇の中に微な明かりが姿を現わした。
それは、あたかも生きているが如く
ユラユラと
私達の目から遠く離れて舞っていた。
川の流れの音と
星のキラメキの音とが
大合唱を始めた時であった。
今までだんだん大きく私達の目に近づいてきていたあの明かりが
突如として姿を消した。
一瞬対座していた私達の間にはざわめきがおこった。
——星は相変らず美しく輝いていた——
しかしそれは、再び力を得たかのよう
ポッと浮かび上がり、今度は確実にこちらの方へやってきた。
やがて、彼の白いパンツが見えた時には
目のうつろい高く積もれた木々は
快ちよい音をたてて燃え始めた。

こうして三段峠でのキャンプファイアの聖火は
彼の手で運ばれたのである。